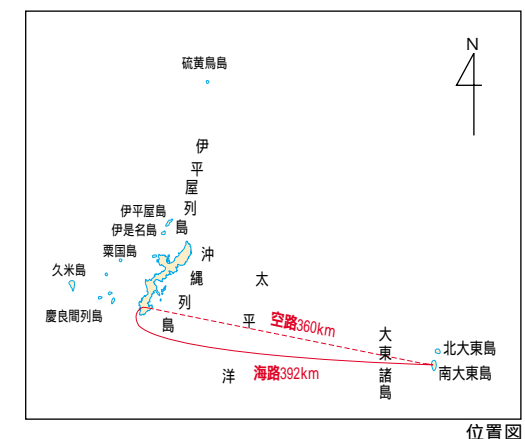


南大東漁港 暫定一部供用開始

南大東島は、那覇の東方約三百六十キロメートルの太平洋上に位置する楕円形をした珊瑚環礁が隆起した島です。この島に、全国でも珍しい「掘込み式工法」による漁港が建設されており、この度一部供用が開始されました。今後、漁港整備が進み全面的に供用されれば島の水産業が発展し、さらには、我が国の太平洋で操業する漁船の前進基地として、また、避難港などとしてなお一層の重要な役割を果たすことが期待されています。



暫定一部供用された南大東漁港



位置図

一、漁港暫定一部供用開始の式典開催

平成元年から工事が進められてきた南大東漁港については、去る十月一日の午前十一時三十分から南大東漁港内会場にて、沖縄県の主催による暫定一部供用開始式典が盛大に



農田振興局長のあいさつ

行われました。

式典のオープニングとしてクス玉開披・祝砲花火、地元漁船二十四隻による「供用開始入船」が行われ、稲嶺沖縄県知事の式辞を始め、農田沖縄開発庁振興局長、岸野水産庁漁港部長、伊良皆県議会議長、照喜名県漁連会長からの祝辞に続き、記念植樹などが行われました。

更に、南大東婦人会、大東太鼓碧会による地元芸能のアトラクションが行われ、同日午後一時三十分から暫定一部供用が開始されました。

二、「掘込み式工法」による漁港の建設

南大東島の概要
島の地形は平坦で周囲は環状丘陵地を形成し、中央はくぼんだ盆地



地元漁船による「供用開始入船」

水産業については、南大東島周辺の海域はマンロやサウラなどの好漁場として、沖縄本島や県外からも漁船がやって来る状況にあります。しかしながら、海岸線は断崖絶壁であるため、漁船が停泊できるような入り江もなく、出漁する際はクレーンによる漁船の上げ下ろしを余儀なくされ、漁船の大型化を図ることができず、水産業の発展を阻害している状況にあります。

事業の経緯・概要

このため、第八次漁港整備長期計画で漁港を整備することとなりましたが、海底地形が急に深くなっていることや、島独特の地形などから通常の埋立工法での工事は難しいことから、全国でも珍しい「掘込み式工法」での工事が採用されました。



南大東漁港への漁船の接岸



クレーンによる漁船の陸上げ（亀池港）

漁港の整備は、昭和六十三年三月に第四種漁港として指定を受け、県営漁港修築事業として平成元年度事業採択・着手され、平成十二年の南大東開拓百周年に合わせて船揚場、第一波除堤、泊地の暫定一部供用を開始することとしたものです。

今後、同漁港では、防波堤、航路、泊地、船揚場、船置場などの整備を行い、地元漁船がクレーンを使用せず、何時でも出入港ができ、操業範囲等に応じた漁船の規模拡大等に対応できる港、太平洋で操業する外来船の前進拠点基地としての避難港、沖縄本島等からの漁船の前進基地として利用され、飛行機と連携した「ナイト漁業」が可能となる港の三本柱の整備方針で事業を推進していきます。

三、南大東島開拓の歴史

南大東島は、琉球王朝の時代からウツアカリシマとして知られていました。明治十八年に沖縄県庁の調査により、日本国標が建てられ沖縄県に帰属しました。

南大東島の開拓は、八丈島出身のアボワドリの羽毛の採取により巨万の富を築いた玉置半右衛門氏により行われました。同氏は日本政府から大東諸島の開拓許可を得て、八丈島島民を引き連れ、明治三十三年（西暦一千九百年）に南大東島へ上陸し、明治三十五年には入植後初めて黒糖八十俵を製造しました。

南大東島は、当初プランテーション経営が行われ、島の経営権は開拓を行った玉置商会にありましたが、その後、玉置商会から東洋製糖、大日本製糖へと移り、昭和二十一年の村制



定期船からの荷下ろし（北港）



南大東漁港完成予想図

施行後も土地の企業所有は変わりませんでした。それは昭和三十九年、米軍統治時代のキヤロウェイ高等弁務官の意向により、土地所有権の個人への移転が認定されるまで続きました。

その後、民間航空路線開通、簡易水道事業開始、NHK衛星テレビジョン放送開始、新南大東空港供用開始などを経て平成十二年一月二十三日に開拓百周年記念式典が開催されています。

南大東島は、別名サウスポートランドと呼ばれていますが、サウスポートランドとは、島を築いたロシア海軍の艦船「ポートランド」にちなんで命名されたものです。